



歌川國松画

下之巻



岡本起泉綴

中之巻



芳川春濤関

東京に開花岡奇縁譚
横濱に薫
編

寫鮮堂壽梓

上之巻

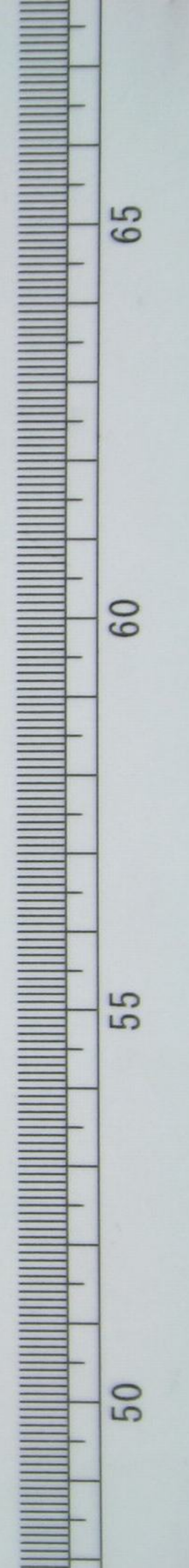


芳川春濤閣

東京に開 とくろくにひら
横濱に薫 よこはまにか
花岡奇縁譚 はなおかきえんたん
編貳 へんじ

上之巻

寫鮮堂壽梓



東家子印

横濱あつと鉄

花園茶録

二編の上

二編の上

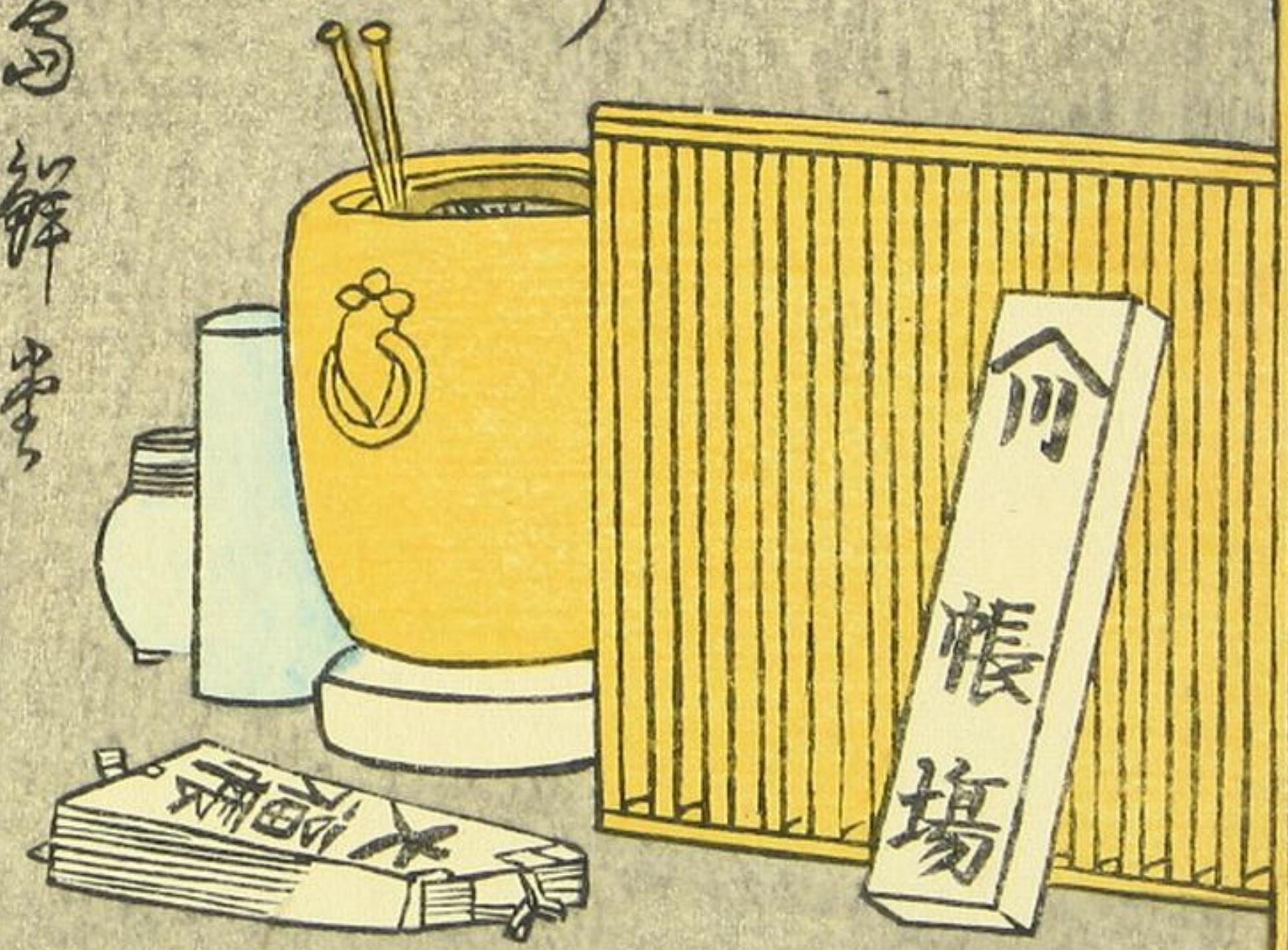
芳川春濤園

園本起泉流

新川園松画

高解

茶癖



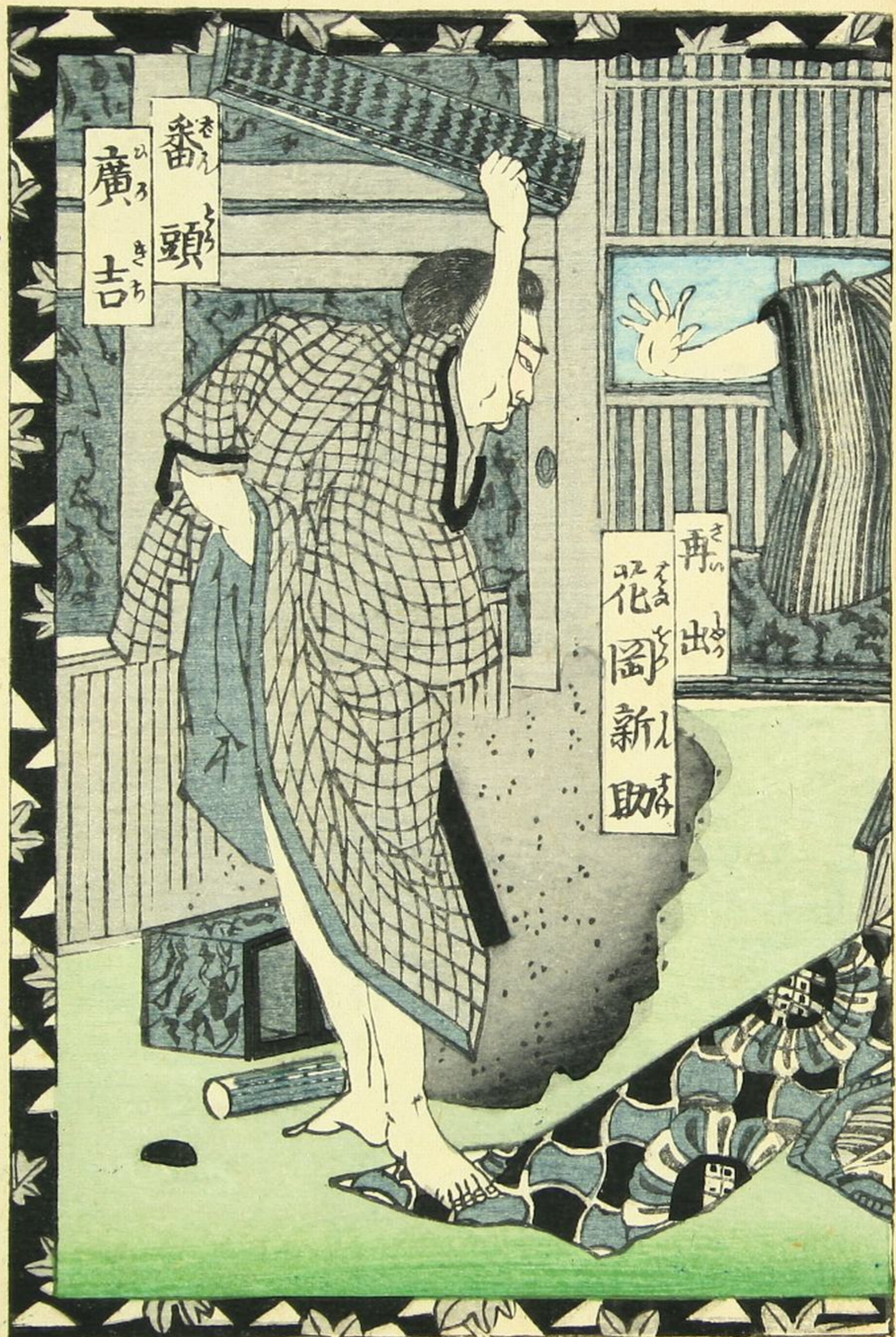
中庸といふ青表紙の初編程子が評判しそのことと其書
 始の一理といひ中ろ散れ万事を為り未復合し一理と
 為るを放て六合の彌り之を巻退りて密に其味窮り
 無くと戯作の冊子も亦斯の如し其始めの一事といひ中ろ散れ
 種々の變化を示し未復合し元の一事に歸を放て天下の
 人情風俗を察せ退りての自己勸懲の鑑と為る見様み
 依て其味窮り無くと嘗て見様み手塩辛さ味噌と揚るも
 丁度此編の中ろ散れ万事を為る極面白き中庸をわび
 書肆の亭主が評判の口上をうめて斯いことなり

明治十五年二月上旬

芳川春濤題



花園二





○愛ゆ又花屋抄女
 英人へヌリが故
 港と待つてあし君
 小月日を送りしが故
 兄弟の婚のあはれも今も
 九才先は生るゝお種
 うぐさへ候るも皆が
 悪い身
 と涙はまど
 今更のうらも
 花月夜はあはれも
 程よく高紙へ
 伝む故

三
 へヌリが故
 月の中
 向と成
 一尉英人
 由送りん
 物とあふ
 九才先
 九才先は生るゝお種
 うぐさへ候るも皆が
 悪い身
 と涙はまど
 今更のうらも
 花月夜はあはれも
 程よく高紙へ
 伝む故

花月夜



新助の姪
 おたね

花月夜



色なき
びく運
まきまを
帰りの
田舎人引込
と娘の体一

〇 徳島と美門の海東と見ゆす
〇 娘の心八九葉なるをくま
女の子の四つの子
お後くと家おれおれと
おれおれと家おれおれと

村の花屋の
おれおれと家おれおれと
おれおれと家おれおれと



出りあがらぬは別の家
業とるまゝと候ふふいふち候
逃月夜横渡と出延 源茶在る
茅協村と急くする仲仙道懸谷
宿と那方

村の境
小まき
控八地帯の
刈るる立揚心
と立入るけ方の

心ハイとさうとて
ますとの小勢助
引寄せとまきと
あつち候れおれの
の弟助とまきと
あつち候れおれの
おれおれと家おれおれと
おれおれと家おれおれと



つぎに名を隠して

同いもの信

新助があれ

次男と信

おつと

お静も

まへま

と信を世に嫁末と信

信を世に嫁末と信

消し去るを金

まへまと信

新助と信

お静

信

お静

まへま

と信

お静

まへま

と信

お静

まへま

と信

お静



そのまゝのまゝ

しるしをいれしむる

と信を世に嫁末と信

信を世に嫁末と信

消し去るを金

まへまと信

と信を世に嫁末と信

信を世に嫁末と信

消し去るを金

まへまと信

と信を世に嫁末と信

信を世に嫁末と信

お静

まへま

と信

お静

まへま

と信

お静

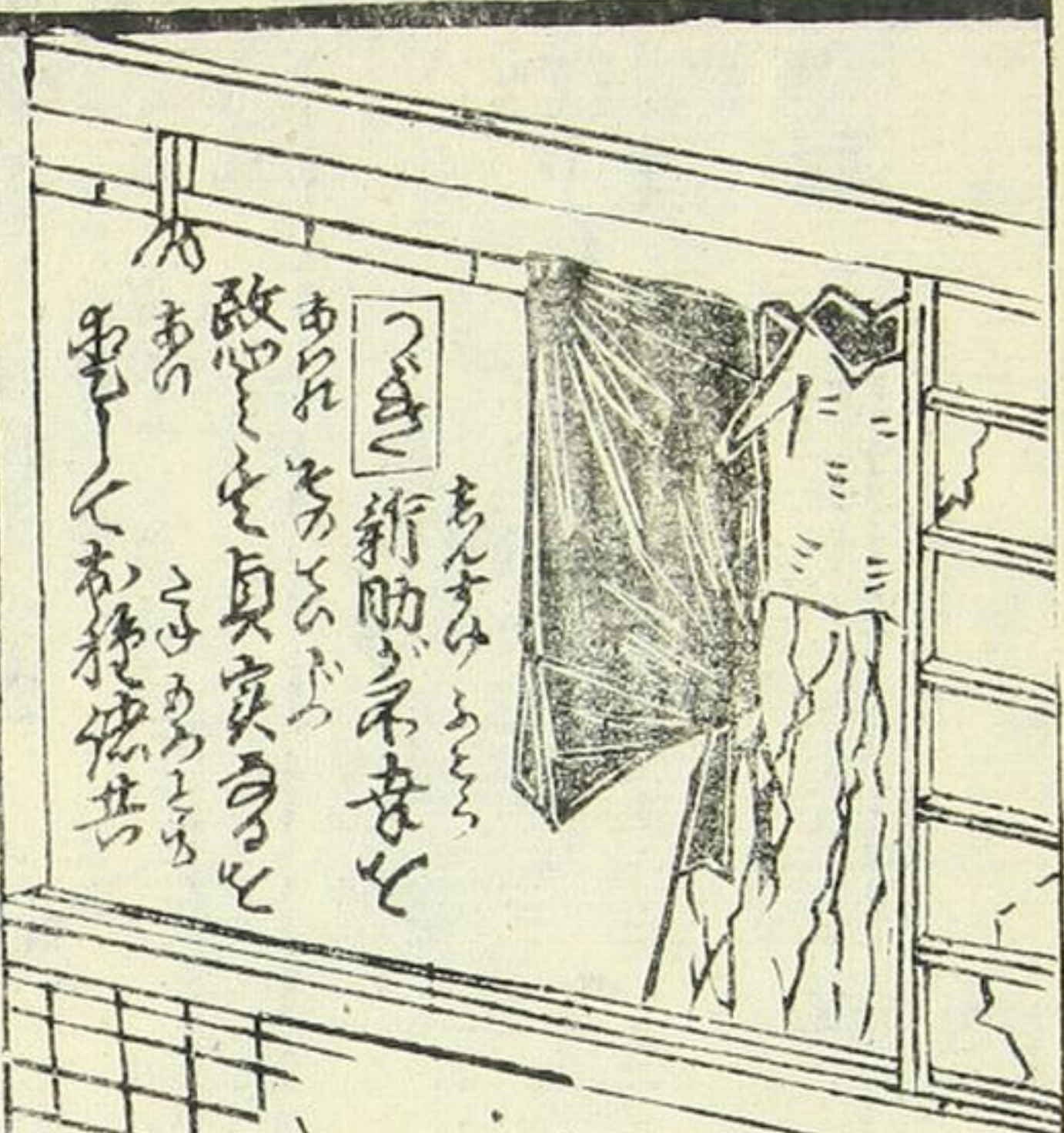
まへま

と信

お静

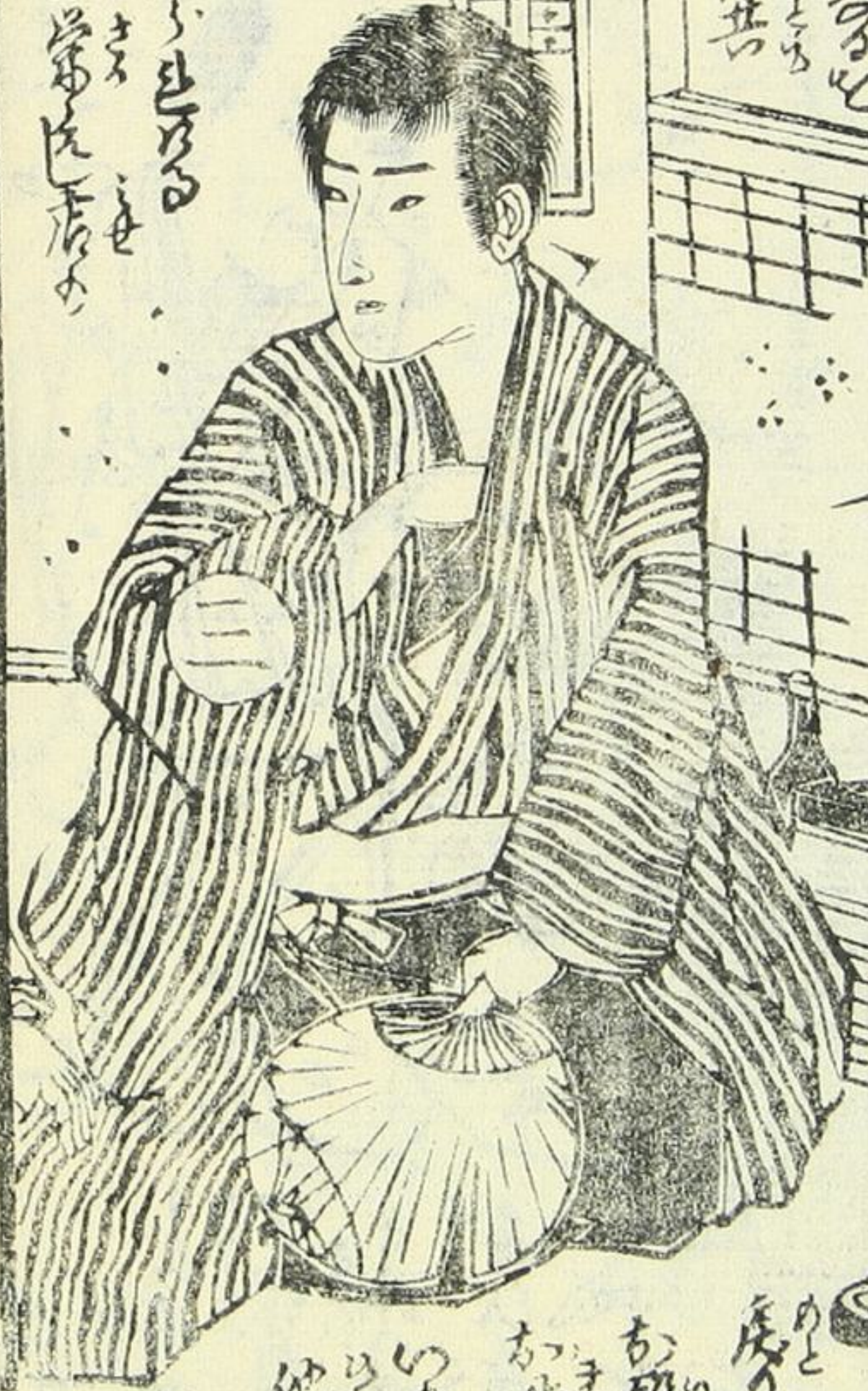
まへま

と信



新助の茶屋
あれぞお茶屋
政をそなた
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋

出入せよ世にめ
いれんせよ世にめ
いれんせよ世にめ
いれんせよ世にめ
いれんせよ世にめ
いれんせよ世にめ
いれんせよ世にめ
いれんせよ世にめ
いれんせよ世にめ
いれんせよ世にめ



あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋

あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋



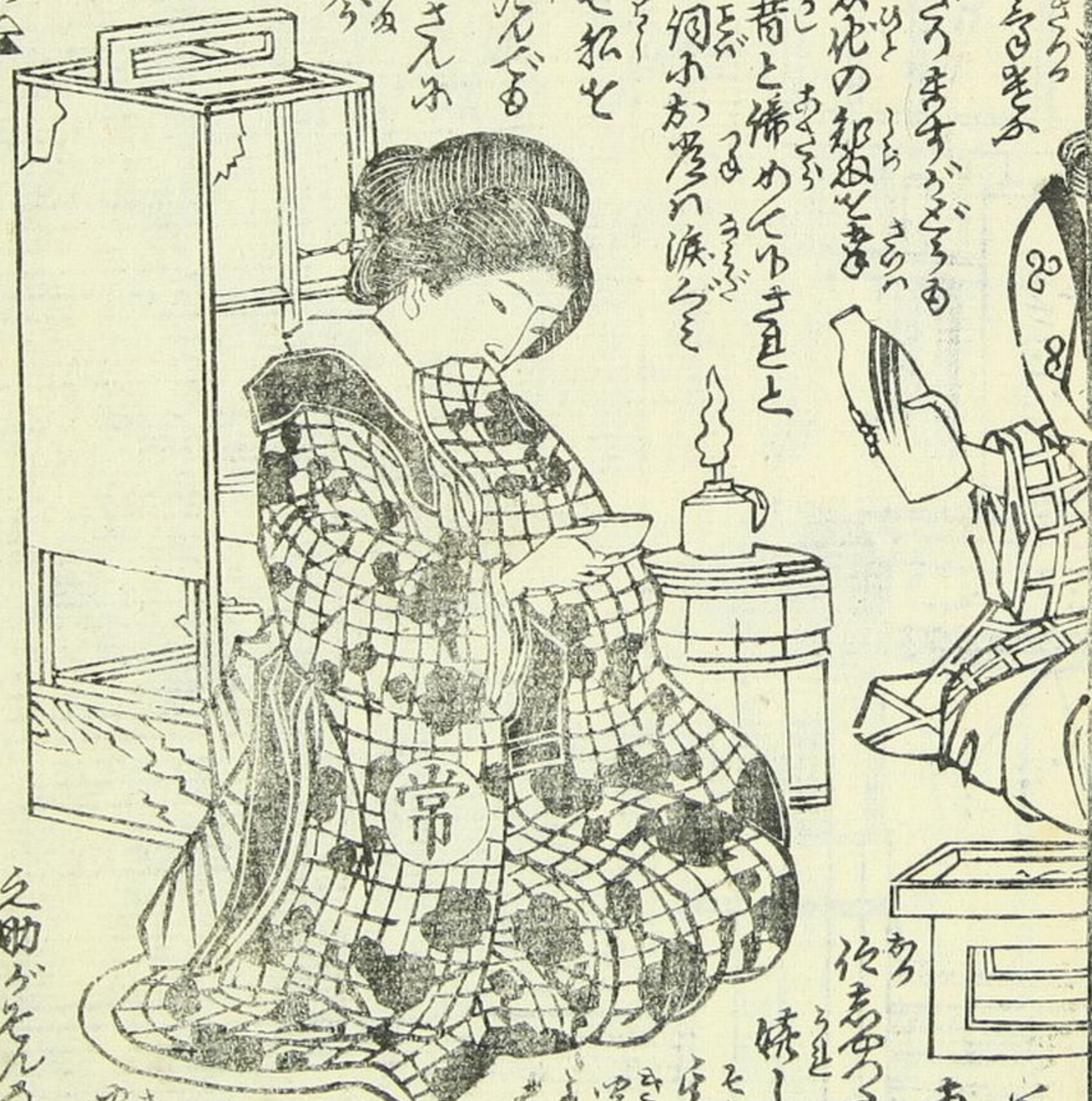
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋
あつたお茶屋

つぎ 同様の假令を置かざるが
 せんとす 後の様木叶くつらねるに
 ぬると後しやうと何所をも
 お清め申渡さるる様なる小あいら
 うらぬと人の娘と赤は
 けねく おはねさぬのお身
 ふ入らばお母様のはね後
 なるお清めと私しづり
 今の内には暇と戴うといひます
 れど日増しお清めは病などお持て
 出らねぬ心のせうさ
 まやれやの結がれ
 てウイ 親も思ふ



△あつらひ
 きておれ
 るお清め
 色も
 やあつて
 おもひ
 ちか入る
 まいり
 ねんが
 親心のか
 ちと清め
 のと之助
 不慮に
 智恵の

ありお母の換まへうさ
 て小さるる様しういごうます
 中へうまませぬお化の知ぬ
 ひさまののりうの昔と備わ
 あひひるる死と之ぬが何小
 アレ又そんなお抱のめねと
 おうに慰めらぬお母さん
 故にのせぬお母さん
 おまごをまごが
 ワノ母さん
 の内小智身と
 心あつた
 の換まへうの放天抵の全

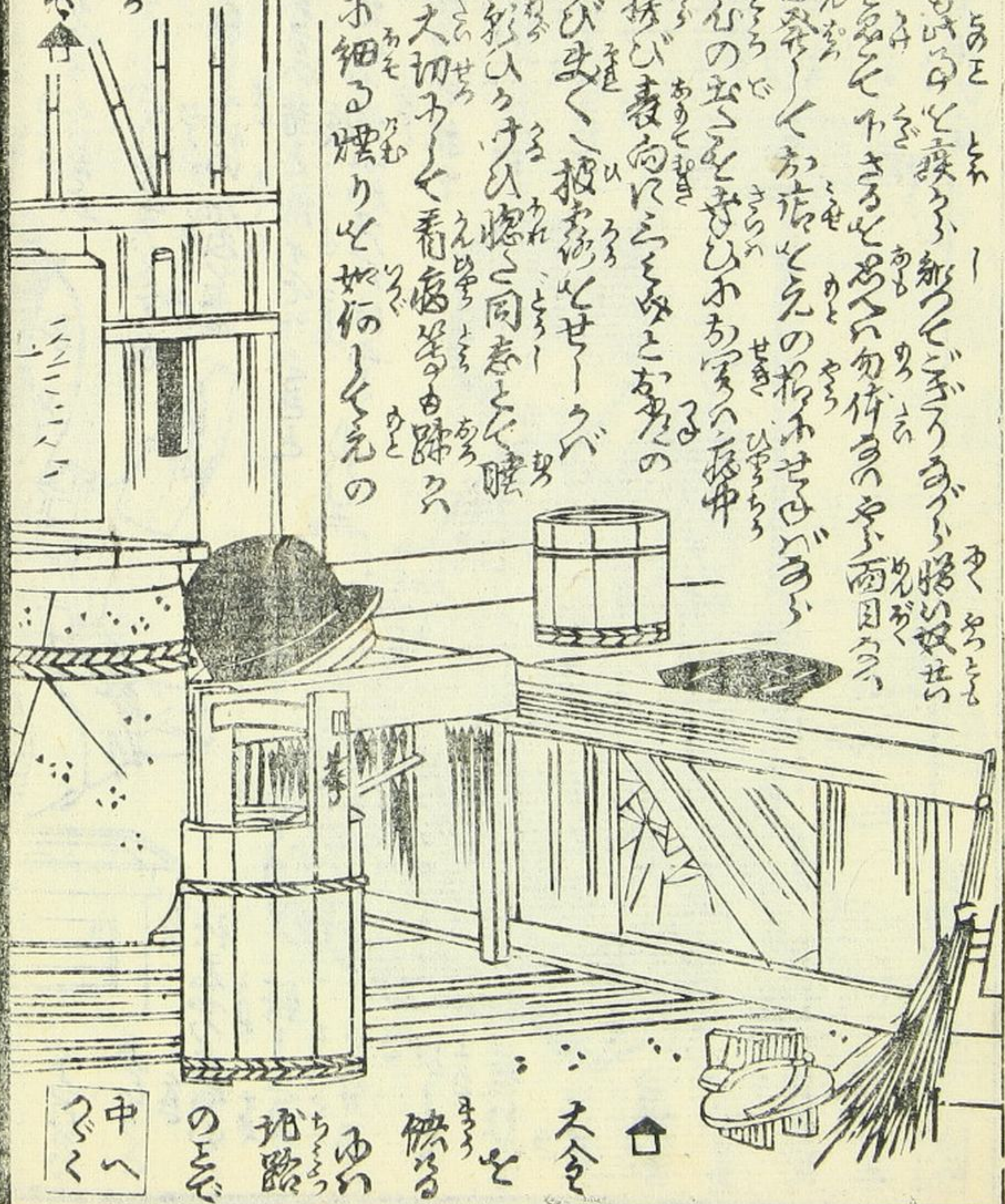


とらね
 あらうと
 後ま
 候し
 金方
 へして
 赤い
 とま
 へ
 の
 娘
 の
 次へ

芳川春壽間本起泉綴

川上行義優警奇談 二編	幻阿竹噺聞書 三編	澤村田之助曙草紙 五編	坂東彦三倭一流 三編	白苺阿繁頼末 三編	嶋田一郎梅雨日記 五編	其名も高橋 毒婦之阿傳 東京奇聞 一編	色吉原味里系持結 三編
出版人 編 島 龜 吉	編輯人 岡 本 勘 造	新板物不致滑 山	界 平 府 藤 栗 毛 三 編	御所櫻梅松録 十 卷	東京上間 横濱上葉 花岡奇縁譚 三 編		

おぼやけの心と疾ふ船と云ふるも、
 あしあき、
 くらりや、
 ぬと、
 二入、
 ぼく、
 ろれ、
 ち、
 のと、
 凝、
 僕



中へ のと 地路 徳る 大令





50

55

60

65

たねもの

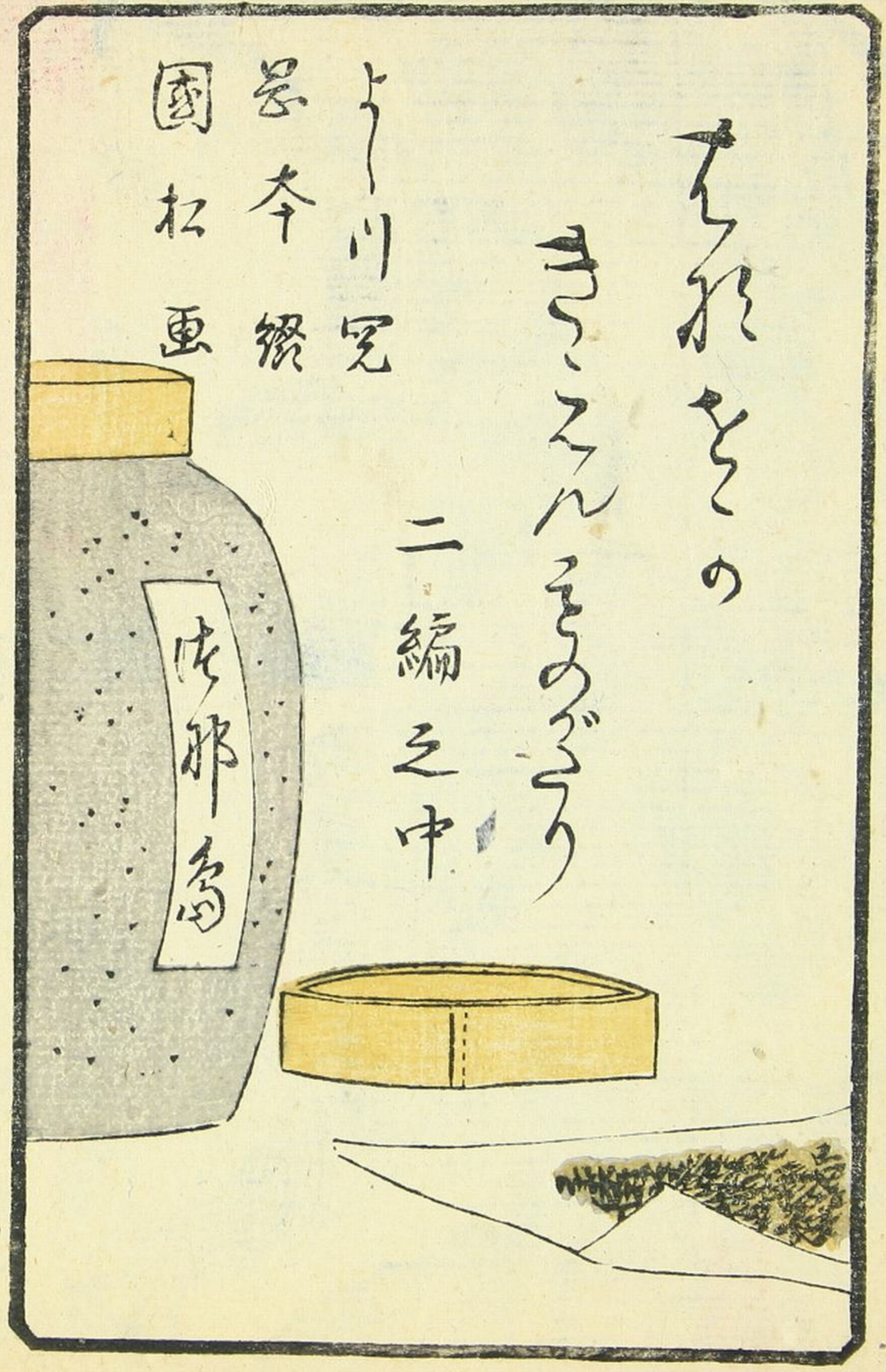
きんらんまのざり

二編之中

より川完

本今綴

國松重



中よりつぎのめまの

はすの運のあまの

すくぬらぬあらう

とを四十四七同措し

家字とえ合し買半

非のお場を敵うお

二田たぬぬ六十四の

利巻をぬ

外さの惚ろんと

丸記の案て買買

の初巻とゆすま

七回二

忽ち千

五百田七

惚けし

腰紙の

うら

あ

あ

あ

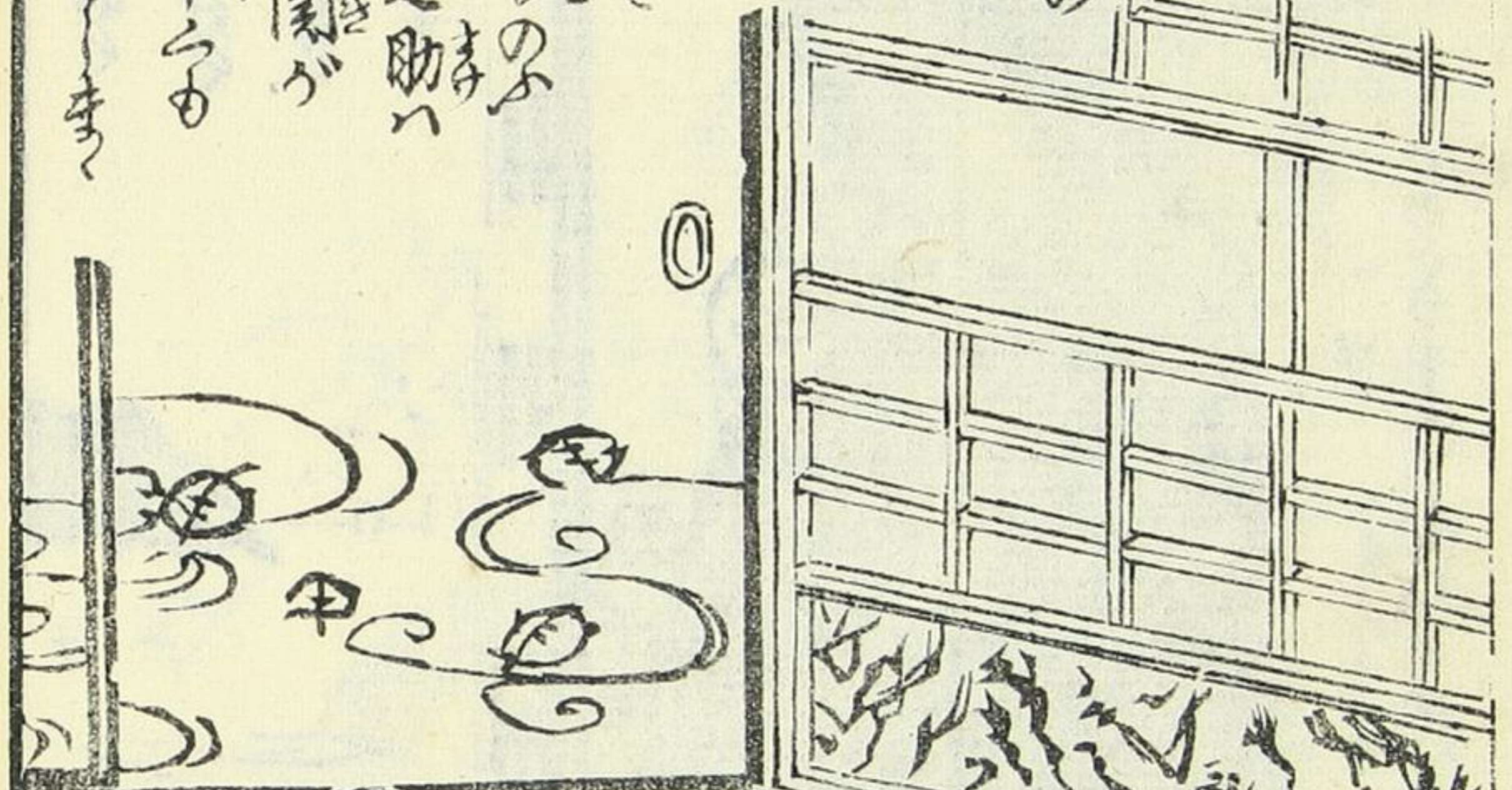
あ

あ

あ

び

久き運動
 加てく名号
 百系成し
 明治十一年の
 十月あて因
 さえ丁宿
 小妻と子ふ
 娼妓が車や
 川敷をへるの
 折しもふ之助の
 化出しくお園が
 店ふあり早うも
 それと察せしま



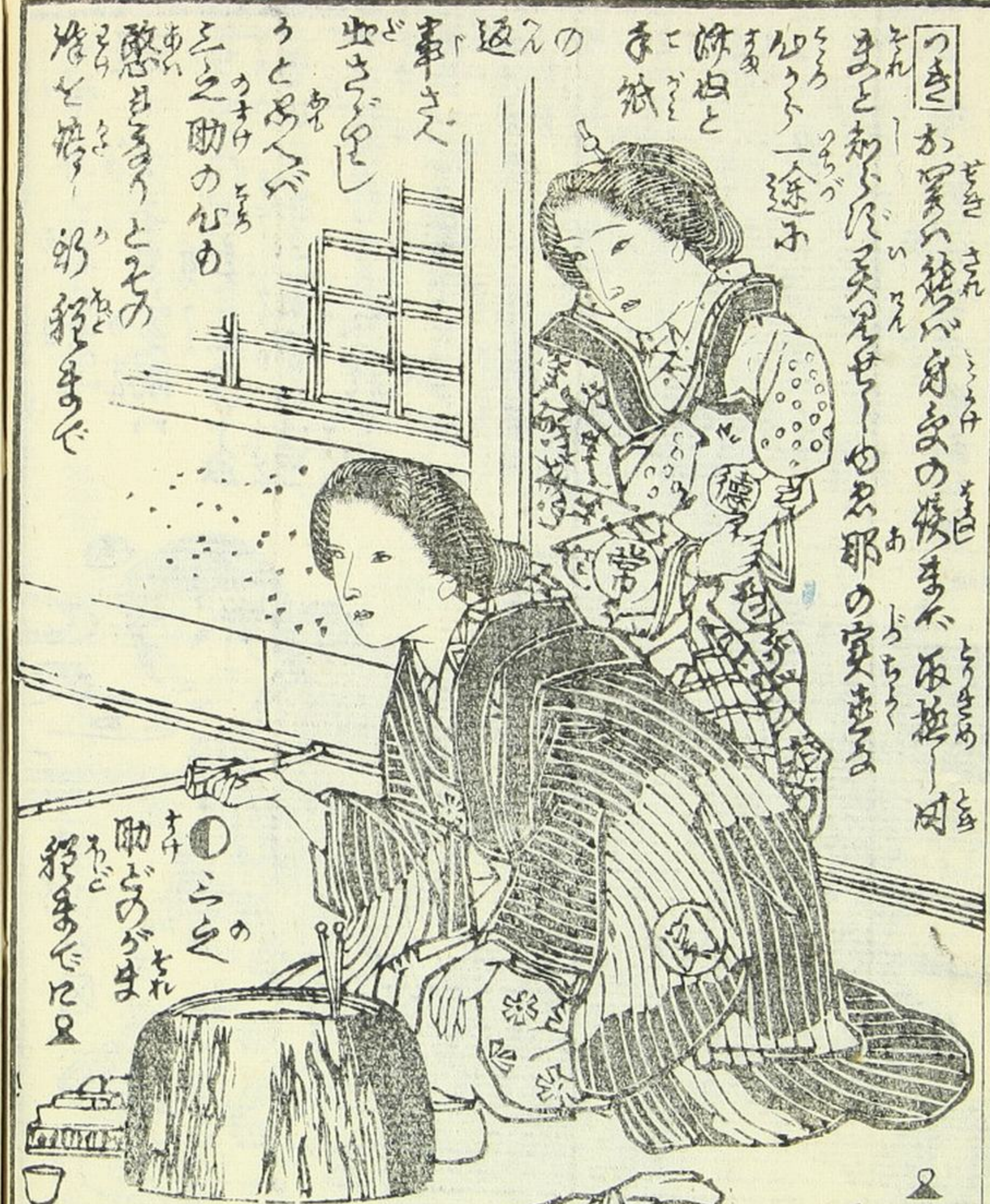
後子紙と
 出せと
 其の
 一室
 も返りかき
 心配であらぬらふ
 儀は
 内なる
 心算の
 方と付る

心配しつゝ葉の若し
 通し今中もふ之助の
 久きこれどをさあつてぬ
 書母の折ふ利りの折
 と若られよと問われ女が
 知れしをみ信ると言ひけ
 案ふ遠くは思ふ飛橋の
 娼妓ゆていりど
 と之助小倉を八十
 田中てめ受とれる
 後が極るを金四十四
 と渡すは小妻が二十四
 何備して居ふかをわん



二十四の
 とさられ
 今日ハ
 切を切
 迫る
 儀は
 出さ
 てま
 始終と
 心で

のき おまの徳の身交の傍まの取極し田
 まとあふは天をせしめ那の安んずる
 仙より一途お
 赤松と
 赤松と
 赤松と



○この
 助のがま
 終まては

お候しき
 り上るの
 何の報しに
 吾をあり
 ませし何
 早う
 生て松
 とお世
 とお世
 ひますこ

約せしととあつて
 止るべしあつて
 助が度り分り
 取極めおむさむとあつて
 とお世
 西のむか
 あらのとと
 更く乳児と
 抱へてあつて
 立おせおまの初対面
 の挨拶しとおお
 愛さまのつらきも何れの世線もらん

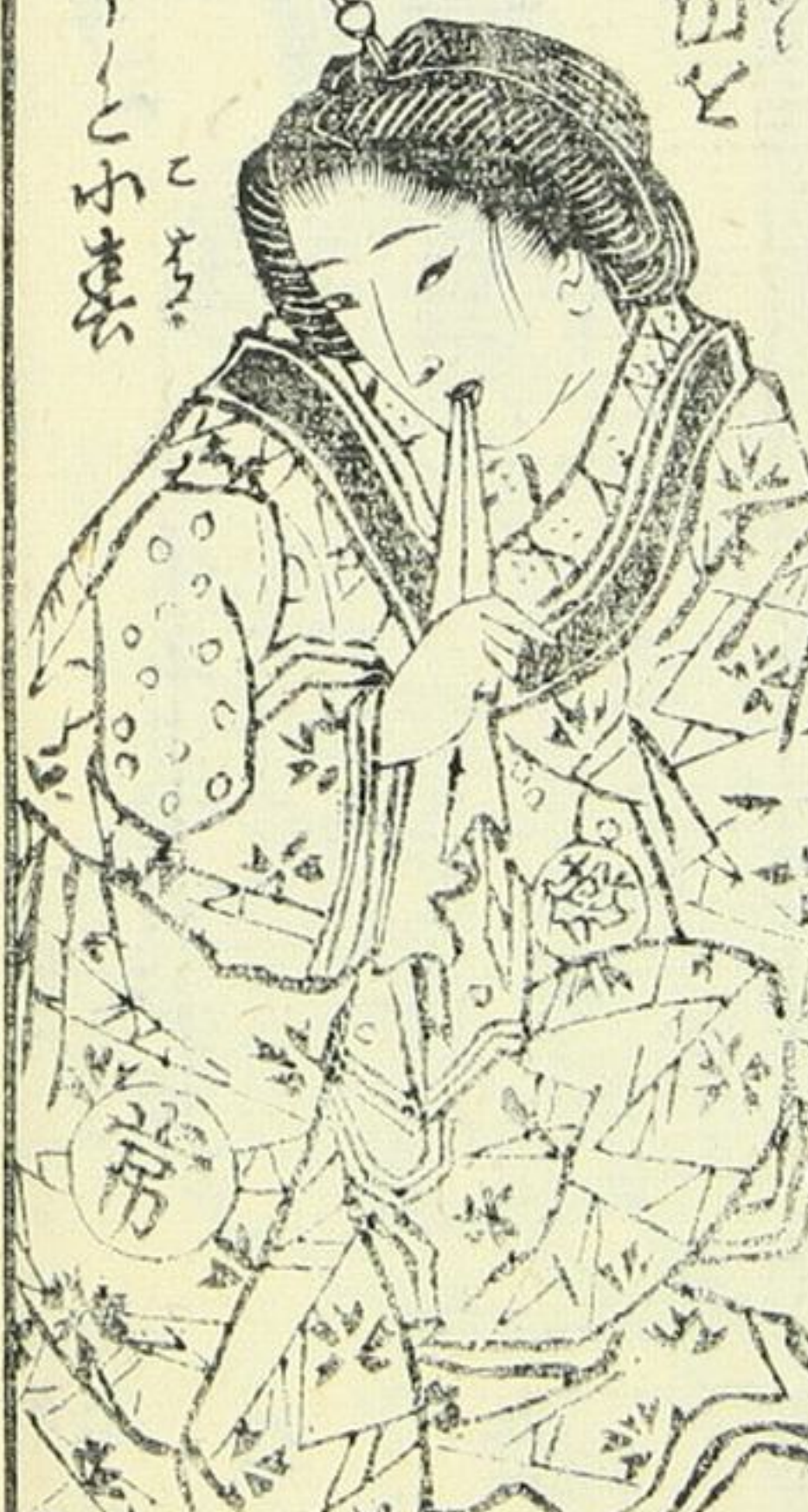


女お世
 おとに 相長き | 優
 愛さ

つぎ焼く加はく何と内もあらあてれま之●小妻と誠家へ引取りが
 小妻と二人が群る飯案と数久しと 小妻と之助と似せし舟屋の狭せ
 影む西へ用事果して立
 居るくると
 之助が小妻
 小妻の様子
 とまはき配て
 踊りの後さあけ
 のひどませ合し
 小妻と女附ゆれむ
 あぐく入て面固まげに
 既たたれま存せんと
 立ちとあ冥が押しぬ出い



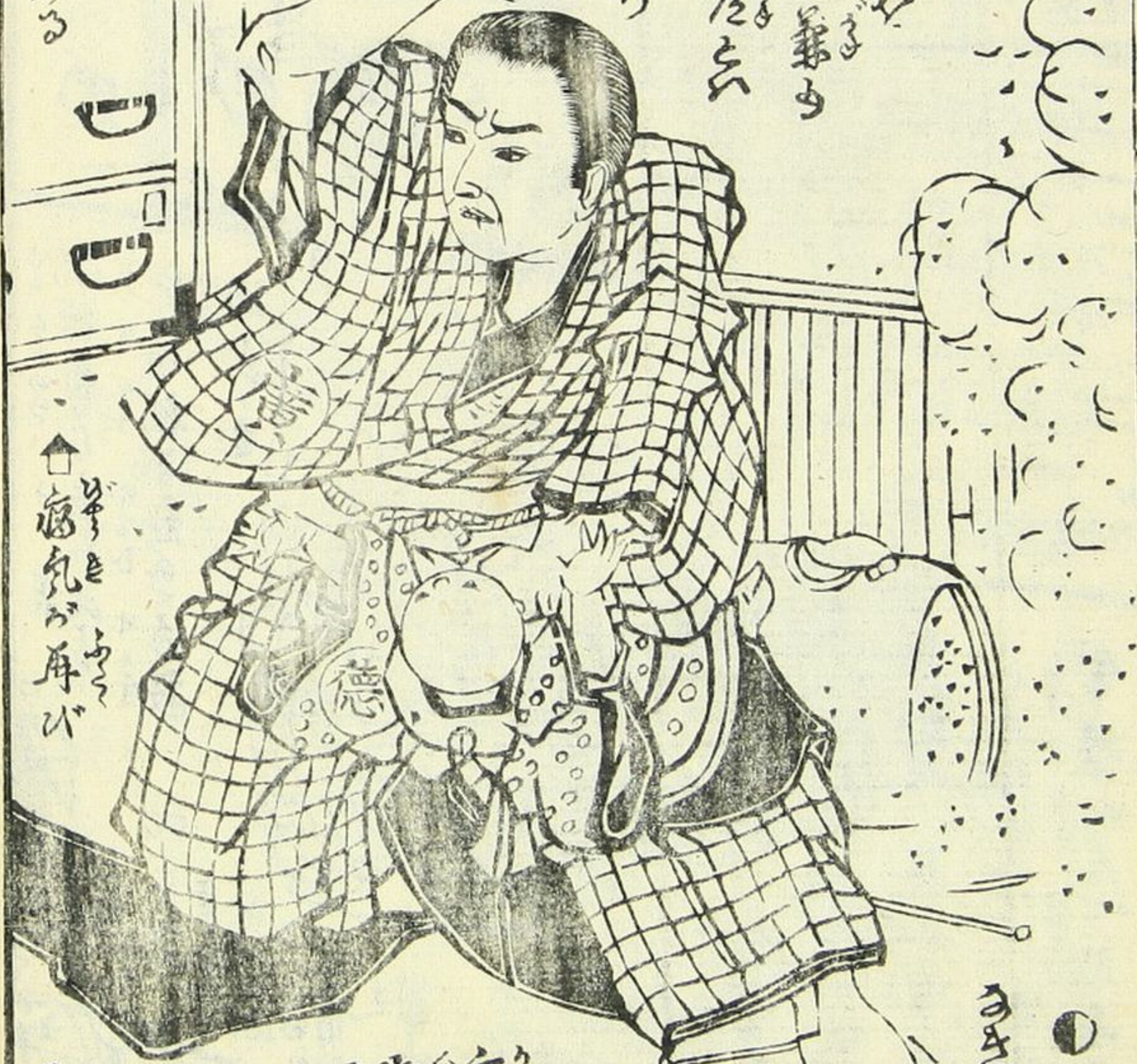
小妻と誠家へ引取りが
 小妻と二人が群る飯案と数久しと
 小妻と之助と似せし舟屋の狭せ
 影む西へ用事果して立
 居るくると
 之助が小妻
 小妻の様子
 とまはき配て
 踊りの後さあけ
 のひどませ合し
 小妻と女附ゆれむ
 あぐく入て面固まげに
 既たたれま存せんと
 立ちとあ冥が押しぬ出い
 あり維くこ小妻
 小妻と誠家へ引取りが
 小妻と二人が群る飯案と数久しと
 小妻と之助と似せし舟屋の狭せ
 影む西へ用事果して立
 居るくると
 之助が小妻
 小妻の様子
 とまはき配て
 踊りの後さあけ
 のひどませ合し
 小妻と女附ゆれむ
 あぐく入て面固まげに
 既たたれま存せんと
 立ちとあ冥が押しぬ出い
 あり維くこ小妻



藏り代は奴らうまの
 おろ
 まをふ程といひ
 約書通る今日
 申小夜を極め
 よと金六十圓
 と後へ
 此共勇と立ちまより
 岩倉橋小むきさる教
 海へ
 之助の
 等盤河之丁目小夜人
 小妻と誠家へ引取りが
 小妻と二人が群る飯案と数久しと
 小妻と之助と似せし舟屋の狭せ
 影む西へ用事果して立
 居るくると
 之助が小妻
 小妻の様子
 とまはき配て
 踊りの後さあけ
 のひどませ合し
 小妻と女附ゆれむ
 あぐく入て面固まげに
 既たたれま存せんと
 立ちとあ冥が押しぬ出い
 あり維くこ小妻

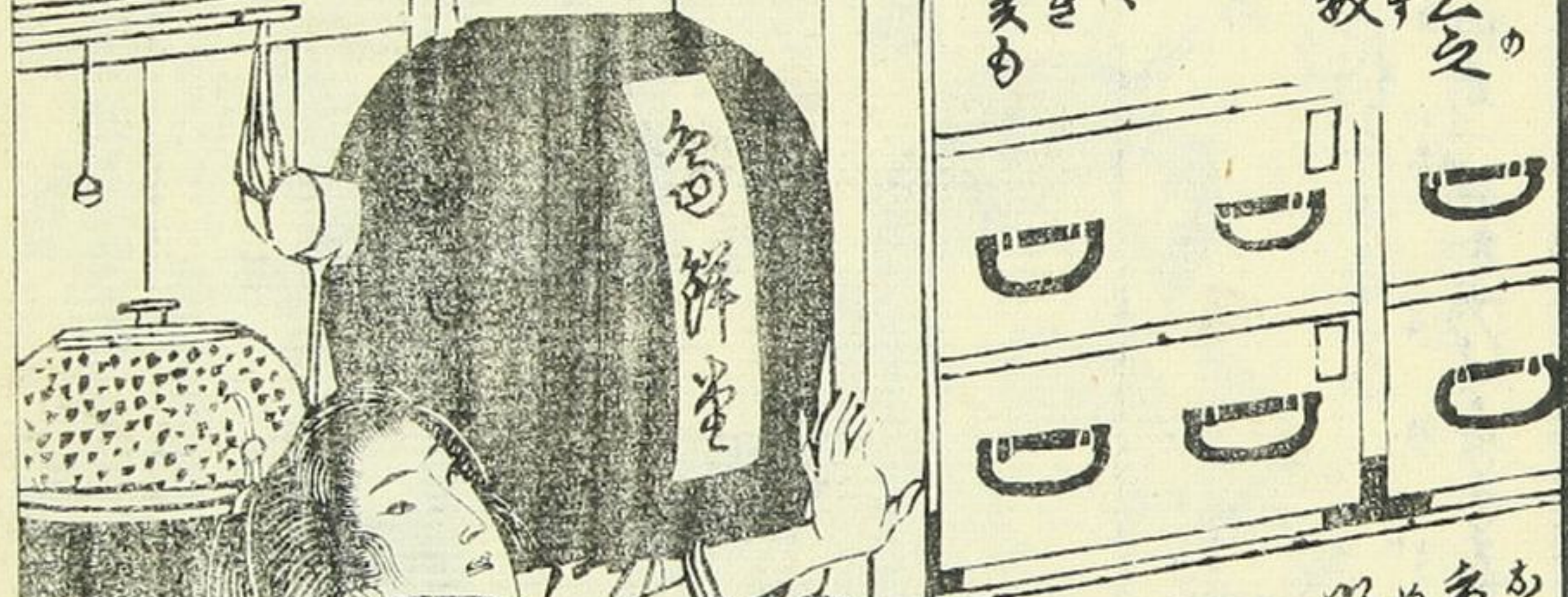
別宅とさきを
 黄ひ小女入をふて
 折く之助が来るや
 市らふのふれふ氣を
 晴けるや海を女の
 之身と名をてまう

金五布と慶
 引人並に夜はうさ
 流しと下女
 虫の家業とあて
 口止りてしるの忍びる

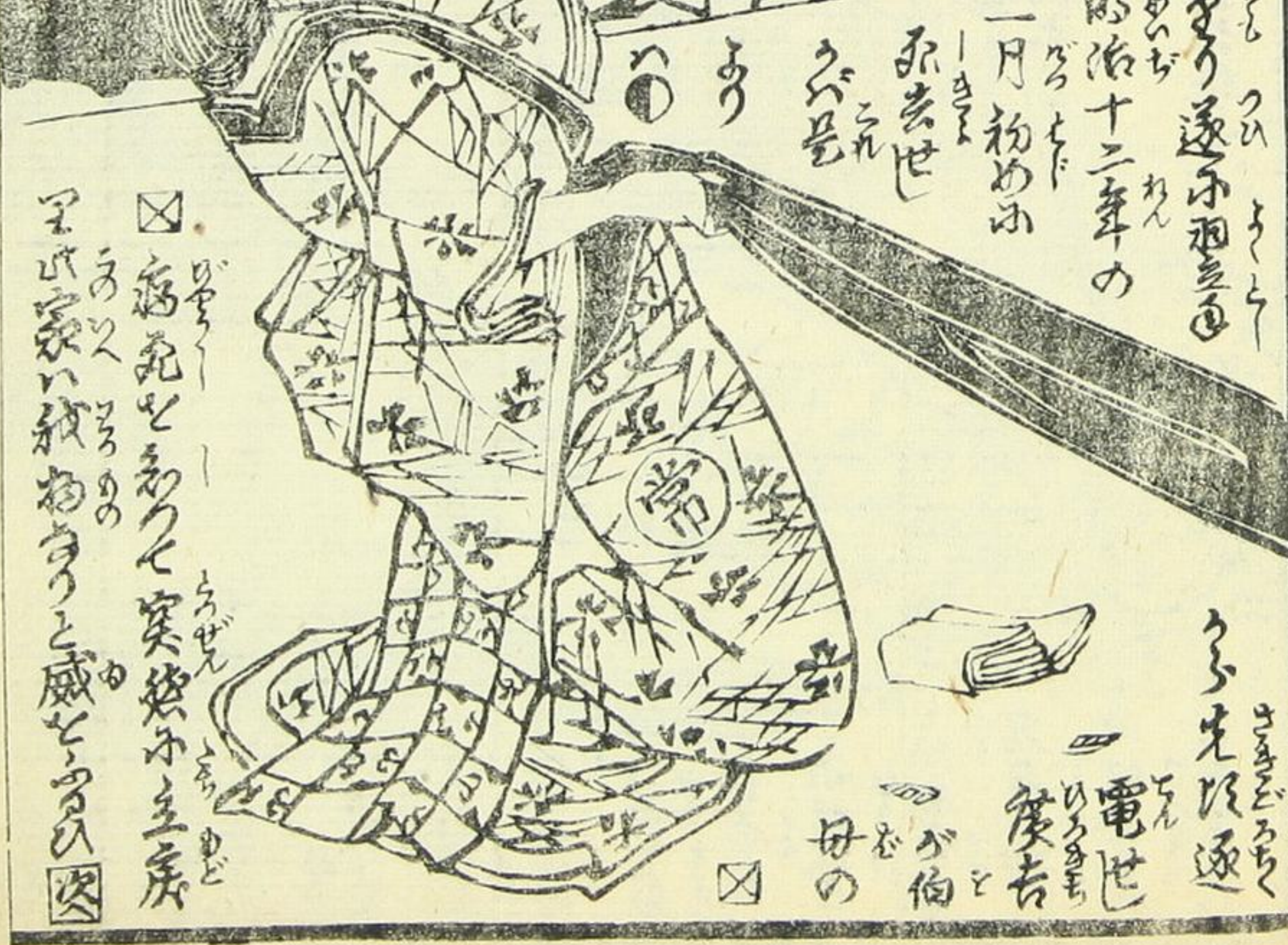


遠義
 之助
 市松
 小美の
 方一の
 出うける
 冬情と
 あつびが
 密うふ
 忍むる

夕たの初初とぬえ
 助の愛小衆て足敷
 響く通ひつあふ
 流石のあつひ由好く
 あふと傍ふるお笑ふ
 心死せ
 久々
 氣の
 強きか
 身に渡
 至快
 多るに



多り遂し相違
 明治十二年の
 一月初め
 赤世
 六月

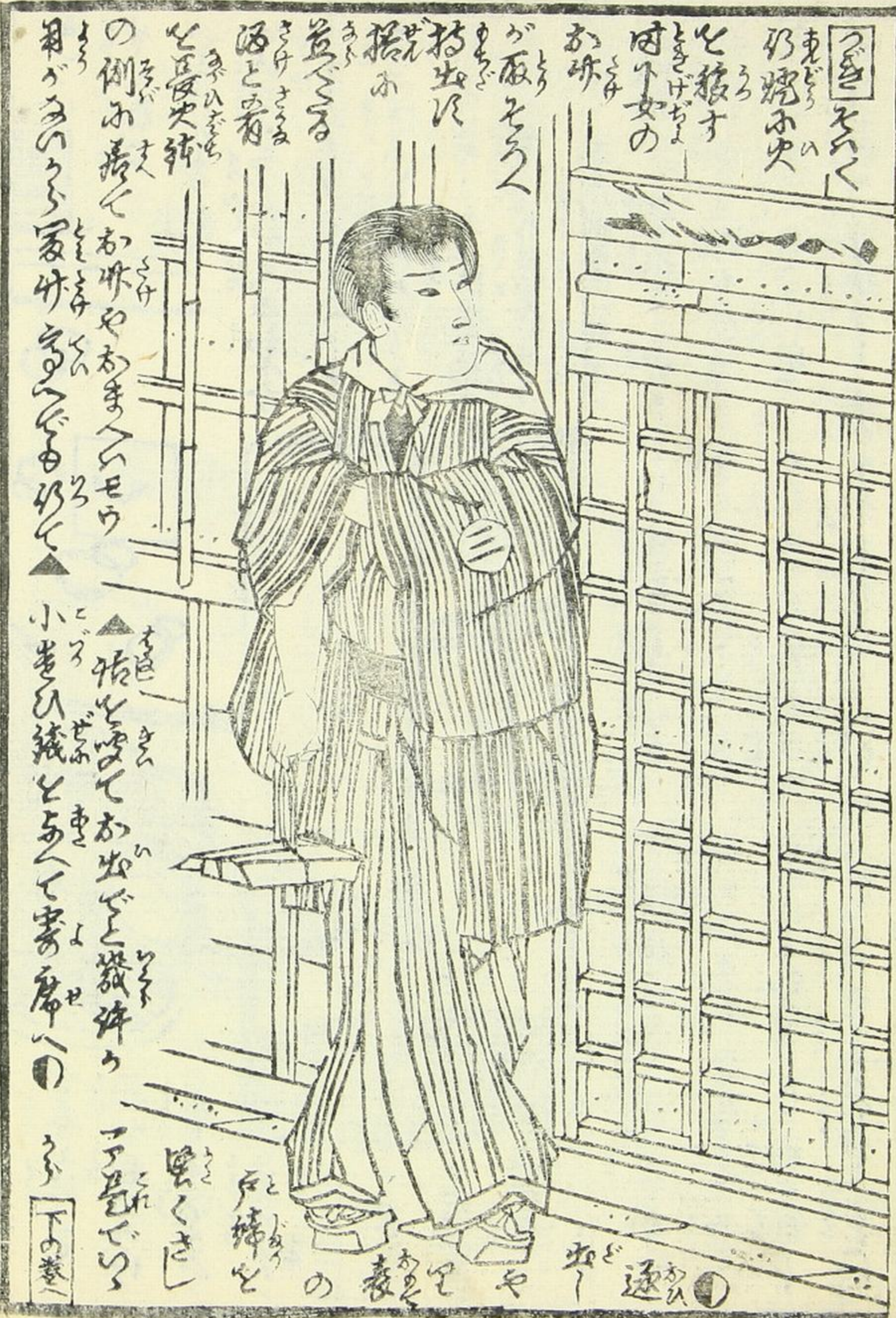


病をとりて突然と主房
 至り家い紋ありと威とついで

010190514272

芳川春庵關本起泉發

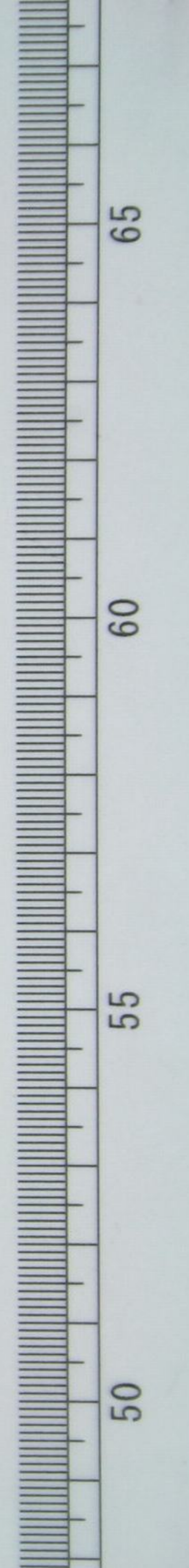
川上行義復警奇談 二編 出版人 關島龜吉	幻阿竹尊開書 三編 編輯人 岡本勘造	澤村田之助曙草紙 五編 新板物不新傳	坂東彦三倭一流 三編 御所櫻梅松録 十編	白曾阿繁顛末 五編 御所櫻梅松録 十編	嶋田一郎梅雨日記 五編 東京上関花岡奇録譚 三編	東京奇聞七編 色吉原安里系物語 三編
-------------------------	-----------------------	-----------------------	-------------------------	------------------------	-----------------------------	-----------------------



花岡奇録

九







と例一〇

あてものよ

うらぐらり

ありませう

河へ泊りて

いさづ

大

常

常

十二回過

だうせう

中からとびきり合はる相違なものがあつた

今度ハ仲居の要合を今村へゆか

〇おつて倚かき御

久しかりだにへ那奴

か送りされて来て

からあちく遠

こと次へ

お世

厚心

お心

お心

お心

お心

お心

お心

お心

お心

お心

お心

お心

1541
6A4



御煎茶
寫鮮堂

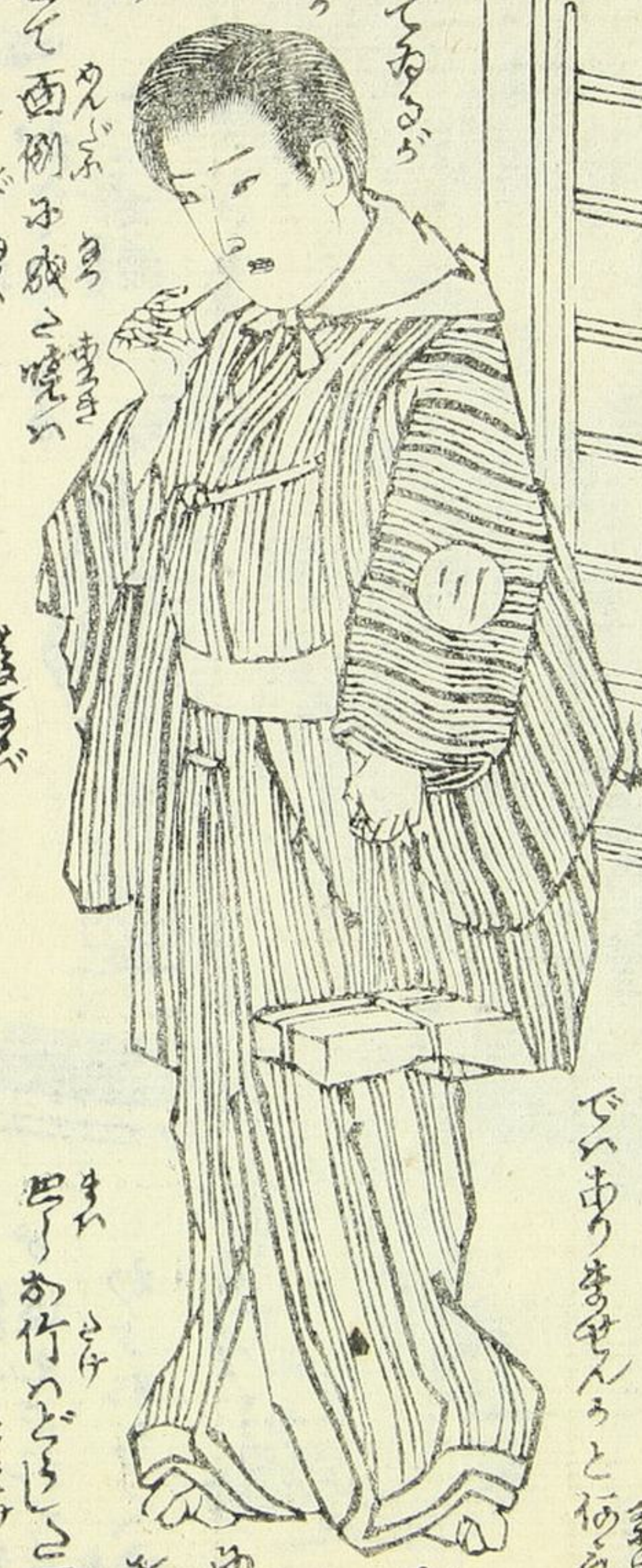
と
と
と
と

二つんの下

48-8411

お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を

お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を

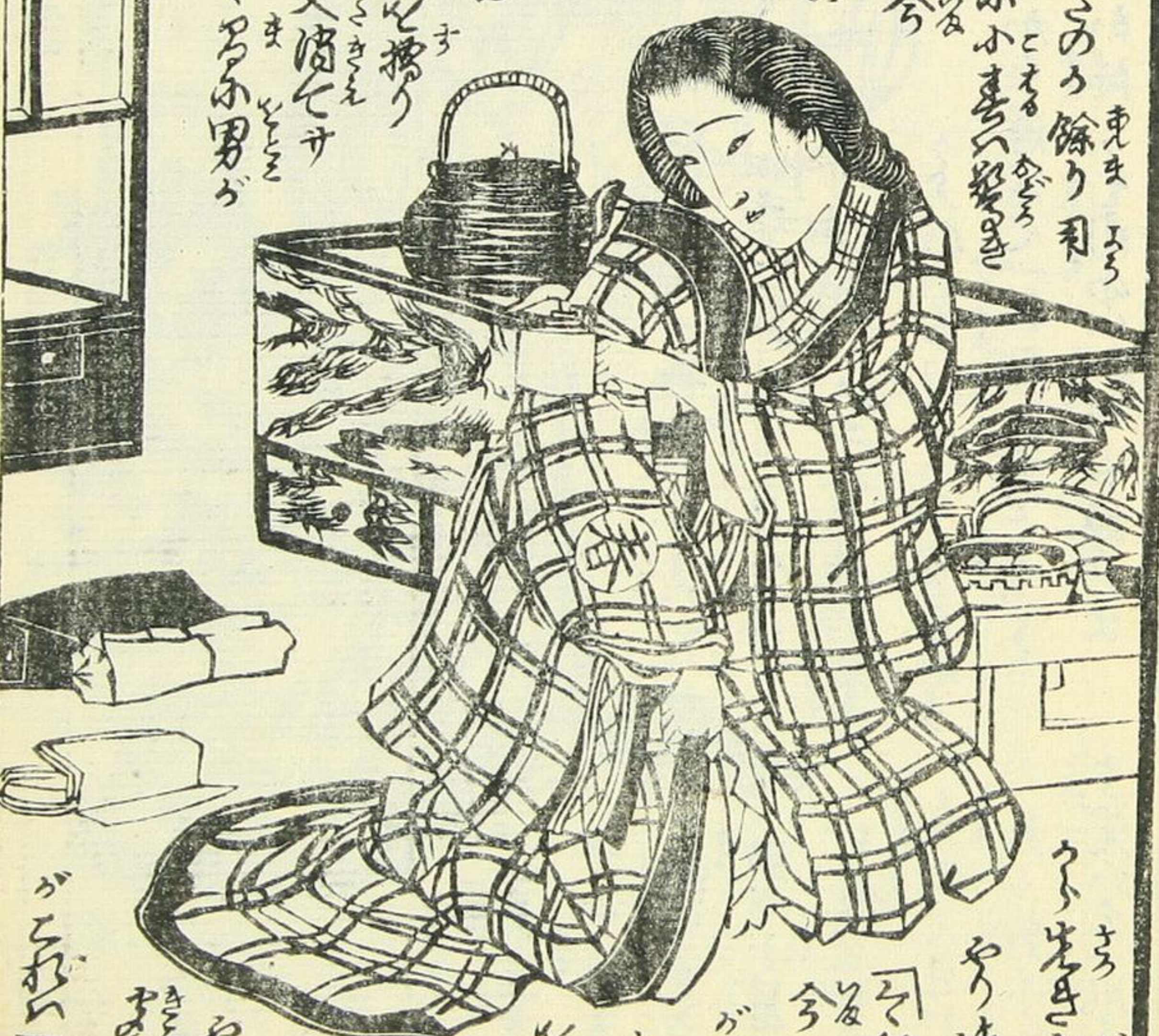


お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を

お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を

お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を

お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を



お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を
お茶の箱の端を

つぎ 髪ごと俯るゝあて小妻
 の膝と抱裏を養やとあて
 さあらぬ仲ゆてイヤゴ
 わへ落字味の悪い
 マアおすんま
 さの丁交
 お婿が出
 まて飛
 ますと
 洗出に
 法にせよはゆ
 雨ふびイヤ
 今疾いどらじあう



春
 風を引この心ありませう
 から藤茶一杯熱いのを上げ
 お味も生肉のわゆるありま
 合思するま
 かのもんを
 二三日格別
 すみせあふふ
 例のつと
 助が小首を
 け合点ゆすと
 互出を其い何
 の急う朝少之
 生児の夜風おほへ

髪小拍撃がうして心持が
 致いりう郡方をもほと致ま
 志小断つて生えぬつて
 来このごうう甲く
 痛やう
 としり目
 小妻へま
 拍小
 情へねの
 乳首を
 と切つて
 痛めが隠せる
 への隠さんと



せうと夜更をぬき申渡
 あく麻袋のて藤茶
 と火桶で暖める
 さむ女控
 子後入るさあふ
 後きた
 我思
 の
 あれ
 優れ
 小拾ひあげ
 抱けが乳首も
 ら知てるお小



小暮が... 小暮が... 小暮が... 小暮が... 小暮が...
 小暮が... 小暮が... 小暮が... 小暮が... 小暮が...
 小暮が... 小暮が... 小暮が... 小暮が... 小暮が...

△ 桶の一本

とま



小暮の... 小暮の... 小暮の... 小暮の... 小暮の...
 小暮の... 小暮の... 小暮の... 小暮の... 小暮の...
 小暮の... 小暮の... 小暮の... 小暮の... 小暮の...

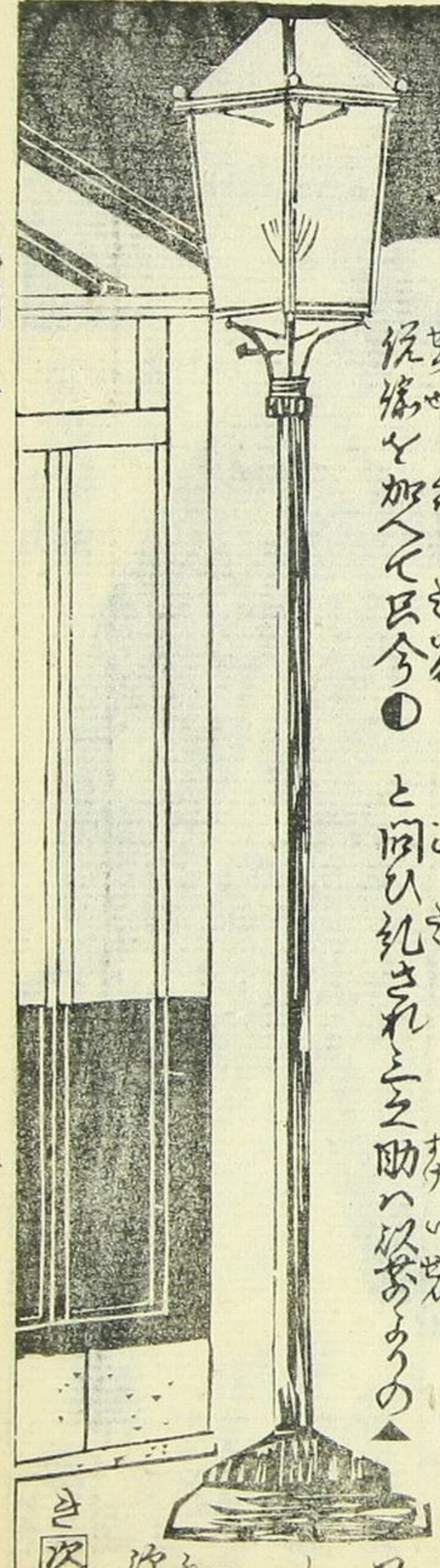
△ 切十二く〇一筆

何の

途中心と心とをめぐりては...
 巡査が一人附添ふに...
 救ひ下さ...
 事との...
 と...
 巡査の...
 月向...
 出...
 今...
 西...
 投...
 け...
 女...
 人...
 今...



後...
 あり...
 男...
 投...
 中...
 殺...
 昔...
 後...
 女...
 老...
 と...
 月...
 出...
 今...
 西...
 投...
 け...
 女...
 人...
 今...



今...
 西...
 投...
 け...
 女...
 人...
 今...

